

## 着実に広がる連携の輪——第5回共生のひろばから

岩槻邦男（兵庫県立人と自然の博物館 館長）

例年建国記念の日に開くことにしている「共生のひろば」も、2010年は5回目となりました。回を追って盛り上がりが強まるこの催しが、昨年よりもさらに多い330余人の参加をえて、5回目の今年もまたひときわ力強く遂行できたことをたいへん嬉しく思っております。

ひとはくは博物館を核とした連携の輪の拡大を生涯学習支援の重要な基盤と考えていますが、人と自然に関する学習活動の成果をより広い視点で検証するための場として、「共生のひろば」を設定しています。ひとはくの生涯学習支援の活動が着実に前進している現実も反映してか、



「共生のひろば」に対する関心は毎年確実に強まり、その成果も年ごとに高まっています。今年も、時間内に収まるようにまとめられた分かりやすい発表と、自分の目で検証された成果を描き出されたポスターが、日常の調査、観察の成果を効率的に示され、また、口頭発表でもポスター会場でも、発表に対する適切なコメントや質疑が行われました。このひろばは学会発表とはまた違って、参加するすべての人々が学ぶ喜びを共有する機会です。その場から、学術的に優れた成果が出てくるのは歓迎されることですが、科学に対する貢献だけを第一義にする活動ではありません。日本で1960年代に、維管束植物のレッドリストを短期間に高い精度で編纂することができたのは、非職業的のナチュラリストが日常的に観察、調査していた地域の生き物の動態の記録が提供されたために可能となったことでした。自主的な学びが、結果として社会への貢献に通じることも珍しくありません。「共生のひろば」では、文化の基盤としての学びがより多くの人々の生涯学習の成果として積み上げていくすがたが描き出されます。ひとはくは、その活動を支援するためにさらなる活動を展開します。

ひろばに集う人たちのうちに、今年はとりわけ学校団体の人たちが目立っていました。口頭発表では、小学校は1校だけでしたが、中学校は2校、高等学校は4校が参加しました。2つの中学校の話題は対照的で、ひとつはこの中学校で数年間蓄積されている希少紅藻種チスジノリの観察で、生活史に関する堅実な記録の補完でした。もうひとつは学校のプールにいるミジンコを取り上げ、その形状、行動、習性について楽しみながら観察を進めたものでした。わたしたちの身の回りの生き物たちと語り合うことのよろこびを、これらの観察を通じて確かめ合う活動が確実に表現されました。小学校の報告は、ピオトープづくりの活動を通じて、そこに生きる生き物たちのいのちについて考えることでした。この年頃の自分が何をしてきたかに思いをいたし、生物多様性豊かな地域に住む小中学生がいのちについて考える瞬間をもつことが、彼らの生涯にとって貴重な経験になるものと考えました。彼らのいのちに関する思いやりが、教条的な思弁に偏ることなく、地球の生命との共生を求めて健全に育つことを祈念します。

さらに、ポスター発表では、小学校が8件に上り、高校で2件、大学・大学院の4件もありました。口頭発表でも、発表の形式にも工夫が見られましたが、ポスター発表では表現にさまざまな試みがなされていました。自分が見たもの、確かめたものを、より多くの人と共有したいという意気込みが強く感じられました。

各賞の審査にあたっては、結果として学校団体が多く選ばれ過ぎないかと心配しながら、評点の高かった発表を中心に選んだ結果、学校団体が健闘する結果になりました。

学校におけるクラブ活動が低調だといわれます。しかし、いい指導者に恵まれた学校では、生徒児童が考える習性をつくりあげるようなすばらしい機会もつくられています。ひとはくもそのような活動を支援することを誇りに思っています。このような活動の輪がさらに広がるために、「共生のひろば」がよいきっかけをつくることになればと期待します。

最近の日本の自然科学系の博物館の活動は、こんなことまでできるのか、と目を見張るばかりです。学校教育の体系は整っていても、学校を終えたら自分の仕事以外の学びを忘れてしまう、とされた日本人が、真の生涯学習を求め、体現するようになりました。それだけの余裕が日本人にできたのか、西欧文明に追いつけ追いこせの100余年をへて、西欧文明に追いつくことのむなしさに気づいてきたのか、真の学びの喜びが求められるようになったのは、人間への回帰といえるでしょう。生涯学習支援を標榜する博物館が黙っておれるはずがありません。

生涯学習支援の輪を拡げる活動がどれだけ実を結んでいるか、体感できる部分はあっても、これは現実の成果を客観的に指標することが難しい課題です。「共生のひろば」は、しかし、ひとはくとひとはくを活用してくださる人たちの協働の成果を正しく表現してくれます。参加者の数、発表の数などの指標の他に、発表内容や会場の雰囲気の上昇が、参加した誰にもひろばの意義を悟らせてくれたでしょう。わたしたちも、年ごとに内容が充実し、高度化する様子を追って、生涯学習支援の輪が着実に広がっていることに自信がもてます。何かの都合で今年はひろばの会場に参加できなかった人も、この冊子が年ごとに充実するのを見て、ここでいおうとしていることを理解していただけるのではないかと思います。成果報告のこの小冊子がそのような効果を担ってもうひとつの輪を広げてくれることを期待します。

日本に博物館活動が定着するのは、現実に成果を積み上げるようになってきた博物館の活動が評価され、博物館のさらなる充実が図れるようになってからのことかもしれません。その日に向けて、「共生のひろば」がもっともっと高度化していくことを期待します。今年のひろばの幕を下ろすときに、来年のひろばへ向けての準備の始まりと意識したいものです。



優秀な発表、ユニークな発表、注目を集めた発表に賞が贈られた